

Index

- 令和 8 年 年頭所感
- 新春挨拶
- 第 2 回日帰り見学会 開催報告
- 計測技術研究会 計測技術シンポジウム 2025 開催報告
- 会員の皆様へのお知らせ
 - 退任挨拶
 - 新任挨拶

■ 令和 8 年 (2026 年) 年頭所感 ■

経済産業省 経済産業政策局長 畠山 陽二郎 様

令和 8 年の新春を迎え、謹んで新年のご挨拶を申し上げます。

昨年は、岩手県大船渡市で発生した林野火災や度重なる豪雨・台風、青森県東方沖を震源とする地震をはじめとして、多くの自然災害が発生した一年でした。被災されたすべての皆様にお見舞いを申し上げますとともに、なりわいの再建に全力を尽くします。

世界では、米国の関税措置や、米中欧をはじめ各国による自国優先の大規模な産業政策の展開など、自由主義経済に代わる新たな国際秩序が生まれようとしています。国内に目を向けると、賃上げや国内投資が約 30 年ぶりの高水準となり、名目 GDP も 600 兆円の大台を超えるなど、日本経済に明るい兆しが現れています。

他方で、我が国は人口減少や少子高齢化という構造的要因に直面しております。労働力人口の縮小は、生産能力の低下を通じて供給面に制約をもたらします。加えて、世界的な資源価格の変動など、外部要因も重なり、インフレ圧力が高まる懸念があります。

こうした状況の中では、官民の投資により、日本経済の供給力を高めることが、需要と供給のバランスや物価の安定に繋がっていきます。米国の関税措置などの国際秩序の変化に対応しつつ、現下のマクロ経済環境認識を踏まえて、高市内閣が目指す「強い経済」を実現していくために、供給力の強化や輸出拡大も含めた経済産業政策、成長戦略の重要性がますます高まっています。

経済成長のためには、地域の活性化や産業集積の推進などが重要であり、地方に投資を呼び込む「産業クラスター」の形成が大きな鍵となります。産業立地の動向は、海外から国内へシフトしており、半導体製造装置など一部品目では国内生産が増加しています。このように産業立地の



需要が増える中、特に今後の工業の発展に不可欠なAIなどのデジタル技術を支えるデータセンターの需要が増えております。特に近年急速に普及が進むAIデータセンターは、冷却に多くの水が必要となることも想定されることから、昨年の産業構造審議会地域経済産業分科会工業用水道政策小委員会の中で、データセンターに対して工業用水の供給を安定的に行える仕組みを検討することを諮問させていただきました。データセンターの新設時には大規模な投資が発生し、地域における経済活動を牽引する事業としての役割が期待されることから、実現に向けて進めてまいります。

データセンターに限らず、地域における産業の健全な発達のためには、豊富低廉で安定的な工業用水の供給が不可欠です。経済産業省においては、これを引き続き実現するため、令和7年度補正予算及び令和8年度当初予算において、工業用水道事業費として計32億円を盛り込み、激甚災害に備えた工業用水道施設の強靱化の加速、デジタル技術や民間活力の活用等の取組を強力に推し進めてまいります。加えて、内閣府の予算事業として措置されている「地域産業構造転換インフラ整備推進交付金」では当省も連携し、半導体等の大規模な産業拠点整備等に向け、工業用水道施設を引き続き支援してまいります。

また、「即時償却」または「税額控除7%」を利用可能とする「大胆な投資促進税制」の創設にも取り組んでいくところ、国内投資を進める企業の皆様には大いにご活用賜りたく存じます。

工業用水道事業者並びに関係者の皆様におかれましては、地域経済の発展に資する工業用水道事業を推進いただけますよう、よろしくお願い申し上げます。

皆様のご健勝とご発展を心よりお祈り申し上げます。新年の御挨拶とさせていただきます。

■ 新春挨拶 ■

地下開発利用研究センター 所長 田中 耕一

新年明けましておめでとうございます。皆様には今年も明るいお正月をお迎えのことと、お慶び申し上げます。

地下開発利用研究センター（以下 地下センター）の最近の活動をご報告いたします。

まず、見学会です。日帰りの見学会を2回開催しました。9月初旬に東京都下水道局「江東ポンプ所江東系ポンプ棟」の工事現場を見学しました。施工者は鹿島建設(株)JVです。このポンプ棟は江東区南西部の雨水を海に排水するポンプ施設棟の新設工事です。工法にはニューマチックケーソン工法が採用されました。底面積が約4,000㎡の巨大な構造物を、地下56mまで沈設させる高度な施工が求められている工事です。見学会には総勢21名が参加しました。11月中旬には、NEXCO東日本(株)の「東京外かく環状道路 大泉南工事」の現場を見学させていただきました。本件に関しては次の記事「2025年度 第2回日帰りは見学会 開催報告」をご覧ください。

9月下旬には、1泊2日の国内見学会として北海道幌延町にある日本原子力研究開発機構の「幌



延深地層研究センター」などを見学しました。総勢 23 名が参加しました。同施設は、高レベル放射性廃棄物を地下深い地層中に処分する地層処分の実験施設です。今回は地下 350m にある水平坑道で行われている地下水、岩盤に関する試験状況を見学しました。一般人がこれだけの大深度地下に降りられるのは国内では本施設だけだと思います。非常に貴重な経験となりました。

続いて地下センターの最近の委員会・WG の活動をご報告します。研究企画 WG では、埼玉県八潮市で起きた道路陥没事故を契機として、ゼネコンや地質調査会社などが保有する最新技術を紹介しあい、このようなインフラの老朽化による事故を避けるためにどのような技術が必要なのか検討を開始しました。自主事業の研究会として「放射性廃棄物」「地熱発電・熱水活用」「計測技術」「水素インフラ」「地盤環境研究会」の 5 つの研究会で活発な研究会活動を継続しています。

受託業務では、今年度 JOGMEC の受託事業「令和 7・8 年度 浮屋根式タンクを活用した新燃料等の貯蔵に向けた検討業務」、及び「次世代型地熱発電技術」に関する実現可能性調査（フィジビリティ・スタディ）委託業務【クローズドループ発電技術】を受託しています。

今年も地下センターの伝統を守りつつ、新しい工法や技術の習得にも積極的に取り組み、職員一同努力する所存です。皆様のご支援・ご鞭撻を賜りますようお願い致します。

本年が皆様にとって良い一年となりますことを祈念し、新年の御挨拶とさせていただきます。

■ 2025 年度 第 2 回日帰り見学会 開催報告 ■

「東京外かく環状道路大泉南工事」

2025 年度第 2 回の日帰り見学会として、11 月 19 日(水)14 時より「東京外かく環状道路大泉南工事(大成 J V)」の現場を見学しました。発注者は NEXCO 東日本関東支社で、参加者は総勢 29 名でした。多大なご協力を賜りました大成建設(株)東京支店外環大泉南工事作業所所長 山本亮太様をはじめ現場の皆様には厚く御礼申し上げます。

大泉南工事は、東京外かく環状道路のうち大泉ジャンクション南側において、合流部（B ランプ）を開削工法、分流部（F ランプ）をシールド工法等により建設する工事です。合流部は開削により外環本線南行きシールドトンネルのセグメント（直径 15.8m）を撤去し、ボックスカルバートを構築します。分流部は外環本線北行きシールドトンネル（直径 15.8m）と F ランプシールドトンネル（直径 11.5m）を非開削切掘り工法により構築します。

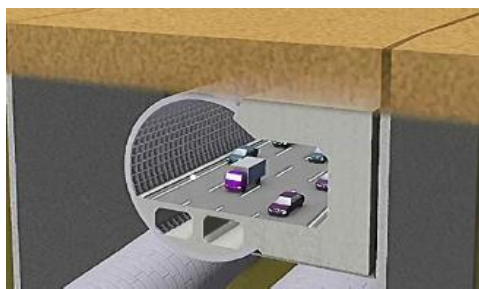
見学会はトータル 2 時間 30 分の行程で、F ランプ、B ランプの順で現場見学を行い、その後現場内に常設されているプレゼンテーションルームにて質疑応答を実施しました。



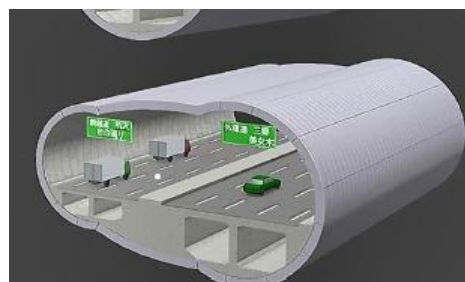
参加者集合写真



参加者と現場による質疑



B ランプ (半断面結合区間)



F ランプ (本線ランプセグメント接合区間)

■ 計測技術研究会 計測技術シンポジウム 2025 開催報告 ■

インフラ検査技術と物理探査の融合 地下空間の可視化と持続可能な社会への貢献

計測技術研究会（委員長：大成建設株式会社 谷 卓也）は12月3日（水）、「インフラ検査技術と物理探査の融合 ～地下空間の可視化と持続可能な社会への貢献～」をテーマに、計測技術シンポジウム 2025 を開催しました。本シンポジウムは3年連続の開催となり、国立大学法人岡山大学 西垣 誠 名誉教授、鹿島建設株式会社 技術研究所 今井 道男 グループ長、管清工業株式会社 管路管理総合研究所 深谷 渉 所長の3名を講師としてお招きしました。当日はオンライン併用形式により60名を超える方々にご参加いただきました。

はじめに地下開発利用研究センター所長の田中より開会挨拶があり、続いて谷委員長より計測技術データベース整備を含む研究会活動や本シンポジウムの趣旨を説明し、講演へと移りました。

西垣名誉教授は、基調講演として「国民の生活を災害から守り、社会インフラを維持するために土木技術者は何をすべきか」と題し、地震・液状化・津波・洪水・斜面災害など多様な災害への長期的視点に立った技術投資の重要性を示されました。また、超微粒子セメントやジオポリマー等の新材料による地盤強化、人工島配置による津波分散、ポンプ式急速排水等の技術に加え、光ファイバを用いた斜面監視（DAS[※]）の有効性にも言及されました。

今井グループ長は、「ダークファイバのインフラモニタリング利用について」と題して、光ファイバ分布型センシング技術（BOTDR、DTS、DAS）の活用事例が紹介され、未使用既設光ファイバ（ダークファイバ）をDASとして活用する非掘削型広域監視の構想を示されました。一方で、データ管理や費用負担等の制度面課題が社会実装の論点であることも指摘されました。

深谷所長は、「道路陥没を防ぐための下水道管路管理とは ～八潮市道路陥没事故からの教訓～」として、下水道起因の道路陥没が年間約3,000件発生し、硫酸腐食による老朽化が深刻化してい



西垣 誠 名誉教授



今井 道男 グループ長



深谷 渉 所長

る実態を示されました。さらに、八潮市の大規模陥没事故を例に従来点検手法の限界を指摘し、今後はドローン、ロボット、AI解析、DAS 常時監視を組み合わせた新たなリスク管理体制の構築が急務とされました。

総合討論では、後付け光ファイバ施工の困難性や点検頻度不足、多用途化によるコスト削減の可能性などが議論され、災害を「点」でなく「線」で捉える広域監視体制の重要性も共有され、「日本の技術を恐れず積極的に社会実装すべき」と総括されました。

以上より、本シンポジウムでは社会インフラの安全性向上に向け、計測技術の中核とした革新的アプローチの方向性が示されました。

※) DAS (Distributed Acoustic Sensing) :
光ファイバを“長い振動センサー”として使い、周囲の振動や音の変化をリアルタイムで検知する技術のこと。

■ 会員の皆様へのお知らせ ■

□退任挨拶

古谷 充史 (地下開発利用研究センター 技術開発部 研究主幹)

2025年10月末日をもちまして、地下開発利用研究センターを退任することとなりました。2025年4月より7ヶ月と短い間でしたが、協会の皆様、各部会や研究会委員の皆様と共に活動させて頂き、ご指導ご鞭撻頂きました。厚く御礼申し上げます。

在任中は、主に、計測技術研究会、地下情報化部会、地下利用推進部会、GEC ニュースの発行等の業務を担当し、多くの会員の皆様に出会い、また、出向元では経験できないような体験をさせていただきました。会員の皆様には業務多忙の中、積極的に当センターの活動にご尽力頂きましたこと、改めて御礼申し上げます。

今後は、出向元の川崎地質(株)に帰任し、地盤構造の3次元モデルによる可視化に携わる予定です。今後も、出向中に得られた知識・経験と皆様とのご縁を活かしながら業務に携わっていかうと思っております。

最後になりましたが、会員の皆様のますますのご健勝を祈念し、退任の挨拶とさせていただきます。誠にありがとうございました。

□新任挨拶

中川 明 (地下開発利用研究センター 技術開発部 研究主幹)

このたび、川崎地質(株)より出向し、2025年11月1日付で着任いたしました、中川 明(なかがわ あきら)でございます。これまで一般土木設計全般に携わり、特に直近20年は道路土工構造物に関する防災・減災を目的とした調査・点検、維持管理、補修・補強設計業務に従事してまいりました。

今後は、地下開発利用研究センターにおいて、計測技術研究会、地下情報化部会、地下利用推進第1・2部会、GEC ニュースの発行、地熱プロジェクト等を中心に担当いたします。

微力ではございますが、皆様のお役に立てるよう誠心誠意努めてまいりますので、何卒ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

